

登山月報



IFSC世界ユース選手権 2017 報告	2
第107回 Mountain World	4
「山の日」制定記念 ―ふるさとの山を登ろう―	5
シスパーレ北東壁初登攀報告	5
平成29年度中高年安全登山指導者講習会（東部地区）報告	9
平成29年度自然保護委員総会 第41回山岳自然の集い―白山大会―実施報告	10
平成29年度臨時理事会報告	12
JMA、寄贈図書、編集後記	13

IFSC世界ユース選手権 2017報告

ユース世代の選手が年齢別のカテゴリーごとに世界一を決める、IFSC世界ユース選手権2017が、8月30日(水)～9月10日(日)(現地時間)にオーストリア・インスブルックで開催された。12日間にわたって世界65の国と地域から約1300名の選手が、ボルダリング(B)、リード(L)、スピード(S)の種目で競った。また、今大会では、IFSC主催の大会としては初めて、東京2020オリンピックでの競技方式「コンバインド(3種目複合)」の決勝も9月9日(土)、10日(日)の2日間で行われ、注目が集まった。

大会3日目の9月1日(金)は、BのユースA決勝が行われ、ユースAの世界一が決定した。女子は、昨年、一昨年の同大会でBとLの両方で優勝を果たしている白石阿島がただ一人4つの課題全てを完登して優勝。男子は、昨年同カテゴリーで優勝の土肥圭太は、4完登したものの、アテンプト差で1位のFilip Schenkに及ばず2位。田嶋瑞貴が3位に入り、日本代表2人が表彰台に上がった。

大会4日目の9月2日(土)は、Bのジュニア決勝が行われ、緒方良行が優勝、榎崎明智が準優勝で日本勢がワンツー・フィニッシュを果たした。

大会5日目の3日(日)は、BのユースB決勝が行われ、女子は伊藤ふたば、男子は川又玲瑛が優勝。男女ともに金メダルを獲得した。女子は2位に谷井菜月、3位に菊地咲希が入り、日本勢が表彰台を独占。男子は抜井亮瑛が3位で、日本勢2名が表彰台に上がった。

女子決勝は、伊藤ふたばがただひとり4つの課題を全て完登して圧勝。世界ユース選手権での初優勝を見事に決めた。男子決勝は、上位3選手が3完登で並ぶ接戦だったが、第4課題を一撃で完登した川又玲瑛がアテンプト差で上回り優勝を果たした。



ユースBボルダリング決勝。女子は表彰台独占

3日(日)、4日(月)はスピード種目の予選、決勝が行われた。

大会9日目の7日(木)は、LのユースB決勝が行われ、女子は森秋彩が優勝。2位に谷井菜月、3位に伊藤ふたばが入り、日本勢が表彰台を独占した。男子は西田秀聖が3位で表彰台に上がった。

女子決勝は、森、谷井、伊藤ともに決勝ルートを揃って完登する素晴らしい登りを見せたが、準決勝でただ一人ゴールまで迫る登りを見せた森が準決勝成績のカウントバックにより、優勝を決めた。

男子決勝は、西田秀聖が2位の選手と同じ高度41+まで到達したものの、準決勝のカウントバックにより3位となった。

大会10日目の8日(金)は、Lの決勝が行われた。

ジュニア男子は緒方良行が優勝、榎崎明智が準優勝。緒方は今大会Bでも優勝を果たしており、2つ目の金メダルを獲得した。ジュニア女子では、田嶋あいかが準優勝。

ユースA男子では田中修太が優勝、女子は、白石阿島が優勝。白石は、世界ユース選手権3大会連続でBとL両方での優勝を果たした。

大会11日目の9日(土)は、複合の決勝が行われた。ユースB女子で注目の複合決勝を制したのは、谷井菜月。S1位、B2位、L1位タイと総合力で森、伊藤を上回っての勝利。森はLとBで1位だったが、Sの5位が響いて優勝に届かなかった。

ユースB男子では、川又玲瑛が2位、西田秀聖が3位。ジュニア男子では榎崎明智が優勝。緒方良行が準優勝。緒方は今大会、BとLで優勝しており、三冠が期待されたが、複合では榎崎が緒方をSとBで上回って初の複合タイトルを手にした。



ジュニアリード決勝。男子緒方が優勝、榎崎(明)が2位

大会報告

大会名：I F S C 世界ユース選手権インスブルック 2017

開催日：2017年8月30日～9月10日

開催地：オーストリア・インスブルック

男子成績		ジュニア	ユースA	ユースB
緒方 良行	ボルダリング	1		
	リード	1		
	スピード	36		
	複合	2		
楢崎 明智	ボルダリング	2		
	リード	2		
	スピード	17		
	複合	1		
中上 太斗	ボルダリング	17		
	リード	4		
	スピード	42		
	複合	9		
原田 海	ボルダリング	11		
	リード	13		
	スピード	22		
	複合	5		
土肥 圭太	ボルダリング		2	
	リード		9	
	スピード		26	
	複合		2	
田嶋 瑞貴	ボルダリング		3	
	リード		9	
	スピード		55	
	複合		7	
田中 修太	ボルダリング		39	
	リード		1	
	スピード		48	
	複合		6	
中島 大智	ボルダリング		69	
	リード		23	
	スピード		27	
	複合		22	
川又 玲瑛	ボルダリング			1
	リード			5
	スピード			29
	複合			1
抜井 亮瑛	ボルダリング			3
	リード			14
	スピード			12
	複合			3
西田 秀聖	ボルダリング			4
	リード			3
	スピード			43
	複合			4
竹田 創	ボルダリング			10
	リード			32
	スピード			31
	複合			16

女子成績		ジュニア	ユースA	ユースB
田嶋あいか	ボルダリング	10		
	リード	2		
	スピード	37		
	複合	5		
高田こころ	ボルダリング	14		
	リード	9		
	スピード	41		
	複合	16		
小島 果琳	ボルダリング		59	
	リード		10	
	スピード		56	
	複合		27	
中村 真緒	ボルダリング		23	
	リード		33	
	スピード		60	
	複合		37	
森 秋彩	ボルダリング			7
	リード			1
	スピード			43
	複合			3
谷井 菜月	ボルダリング			2
	リード			2
	スピード			35
	複合			2
伊藤ふたば	ボルダリング			1
	リード			3
	スピード			34
	複合			1
菊地 咲希	ボルダリング			3
	リード			5
	スピード			51
	複合			5



日本は大会を通して計24個(金9、銀9、銅6)のメダルを獲得し、国別メダルランキングでトップを独走する好成績をおさめることができました。

第107回 Mountain World

カラコルム2017 K2は3年ぶりの成功

池田常道

初登頂60周年にあたる2014年に、パキスタン＝イタリア隊など12隊(少なくとも36名)が登って以来途絶えていたK2(8611m)が3年ぶりに登頂者を迎えた。ロールワーリン谷のミンマ・ギャルジェ・シェルパ(31)が率いる公募隊「ドリーマーズ・ディステーション」がクライアントを含む12名を頂上へ送ったもので、ニマ・ヌル・シェルパとパキスタンのファザルが無酸素、他はすべて酸素を用いた。ラッセル・ブライスのHIMEXなど有力公募隊が雪崩の懸念から早々に断念するなか、この隊だけが強行した。3年前に無酸素で登ったミンマは今回酸素を使ったが、C2、C3にいる間に強風が吹き止まないのを見て、頂上ピラミッドの積雪は吹き飛ばされたと判断したのだという。

ミンマの隊はK2の1週間後にブロード・ピーク(8051m)に登ったほか、春にダウラギリ(8167m)とアンナプルナ(8091m)に登頂、6月にはナンガ・パルバット(8126m)の頂稜に達し、最高点が判明しないまま引き返していた。彼は秋に再挙し、10月2日にクライアントら8名とともに登頂を果たした。

ブロード・ピークではこのほか、オーストリアの公募隊「フルテンバッハ・アドベンチャー」のルパート・ハウアー隊長がシェルパ、クライアント各3名とともに登頂。スイスのコプラー・アンド・パートナー隊からも4名が頂上に立った。また、8000m×14座に王手をかけていたオスカル・カディアチ(64、スペイン)も登頂に成功した。

このほか、チェコのマレク・ホレチェックとズデニェク・ハークがガッシャブルムI峰(8080m)南西壁のヘッドウォールを直登する新ルートを開拓したことは前号本欄に掲載したとおりである。ホレチェックはこれが5回目の南西壁挑戦だった。

チリのアンドレス・ボッシュ(29)、アルマンド・モンテロ(36)、アレハンドロ・モラ(39)は、K2ベースの南西にあるプラクパ・リに向かった。ドイツのラルフ・ドワイモフィッツが昨年、ナンシー・ハンセンと北面のサヴォイア氷河から試みた山で、彼らは南面のほうに可能性があるという示唆していた。チリのトリオ

はその言葉どおりカルカル氷河に入り、ボッシュとモラが南峰(7046m)に登頂した。これにさきだち、3人は6270mの無名峰にも登頂、ウルドゥ語でチリ(トウガラシ)を意味するミルチと名付けた。

しかしクライミングの観点から、ことしのカラコルムで活躍が目立ったのは3つの日本ペアだった。

平出和也と中島健郎はバトゥラ・ムスターグのシスパーレ(7611m)北東壁を初登攀した。74年の西ドイツ＝ポーランド隊、94年の菟野山岳会隊(いずれも東稜)に続く第3登である。7月26日BCに入り、東稜(5600mまで)とパスー・ピーク(6750mまで)の順応行動を終えてフンザで休養。8月18日に攻撃を開始して、停滞1日をはさむ5日間で頂上へ抜けた。平出はこれまでに北東壁(07年)と南西壁(12年、13年)に挑戦してきたが、今回宿願を果たした。

はるか東のチャラクサ氷河では、横山勝丘と長門敬明がK7西峰(6615m)の長大な南西稜を初登攀。この2人に増本亮を加えたトリオは3年前にも挑み、途中のバダル・ピークを越えた先で下降していた。今回は8月2日に下部9ピッチをフィックスして5日から攻撃。3日間でバダル・ピークまでの複雑な岩稜を登り切った(35ピッチ)。そこから先は氷雪におおわれたリッジ登攀となり、9日の午前中に登頂。その日のうちに北西壁を氷河まで下降した。ルート名はサン・パッチ・スパー(E D+, 2300m, 5.11c RA2)。

佐藤裕介と増本亮は、同じチャラクサ氷河のベアトリス(5800m)東壁のフリー化を目標にした。97年に英国トリオが登ったエクセレント・アドベンチャー(E D2+, 750m, A3+)に8月1日、カプセルスタイルで取付き、壁の中に6泊して稜線に抜け、岩稜2ピッチと雪稜を経て9日に登頂。全20ピッチ、最高5.13aのクライミングだった。



チリ隊が登ったプラクパ・リ南峰。中央峰(右)の肩に過ぎず、独立峰というには無理があるようだ

「山の日」制定記念

—ふるさとの山を登ろう—

愛媛県・瓶ヶ森(1,896 m)

今年、第72回国民体育大会—2017 愛顔つなぐえひめ国体—を開催した愛媛県山岳連盟では、8月11日の祝日「山の日」に記念事業として、西条市と高知県にまたがる石鎚山系の瓶ヶ森(1,896 m)で「環境啓発親子登山」大会を実施した。

当日は、一般参加者39家族89名に県山岳連盟や県職員、看護師などスタッフ62名の計151名が参加した。

「山に親しむ機会を得て、山の恵みに感謝する」祝日「山の日」の意義を踏まえて、親子で山に親しんで貰おうと、昨年より県山岳連盟や県が山の日を実施。

今年は、県内で3番目に高い瓶ヶ森と周辺の氷見二千石原や瓶壺を巡るコースを歩いた。

午前10時半、瓶ヶ森へ男山コースと氷見コースの二手に分かれて標高1,700 mの登山口を出発。各コースに指導者、講師、看護師が同行し、石鎚山固有のイシヅチボウフウやイシヅチサンショウウオの幼生など、珍しい動植物を観察しながら約5時間の散策を楽しんだ。



瓶ヶ森頂上(女山)で合流し、講師による瓶ヶ森の成り立ちや動植物についてレクチャーがあった。また、避難小屋建設予定地では、その概要について説明された。

参加者は落伍者もなく、全員登頂。山頂では登頂証明書が手渡され、子どもたちは石鎚山を背景に写真を撮ったり、景色を楽しんだりして過ごしていた。

昼食後、班編成してコースを変えて下山し、全員無事に登山口に戻った。

スイカを食べて、愛媛県のゆるキャラ「みきゃんちゃん」と記念撮影して解散となった。

シスパーレ北東壁初登攀報告

昨秋、ルンポ・カンリ(7,095 m)の未踏の北壁を初登攀した平出和也、中島健郎のペアが、今夏はパキスタンでシスパーレ(7,611 m)の北東壁初登攀を成し遂げた。

7月21日、イスラマバードより陸路でフンザへ向け出発。夏季のみ通行可能なバブサル峠経由でチラスに入り、そこからはK K H(カラコルムハイウェイ)をフンザへと北上していく。近年、フンザは外国人よりもパキスタン人観光客で賑やかでびっくりする。

〈トレッキング〉

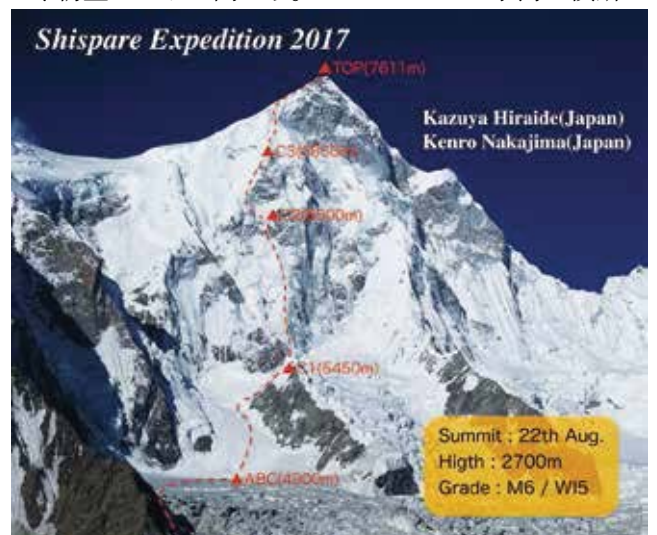
7月25日、K K H沿いのパサー村からジープに乗り換え、Borith Lakeを越えて終点のZeroPointよりトレッキングが開始する。初日の歩きはLuzhdur(ラズダール)まで3時間半ほどだが、白く綺麗なパサー氷河を横断する。ポーターたちの巧みなルート・ファインディングで、迷路を抜けた左岸のモレーンに広がる草原でキャンプをする。

翌26日は、尾根上のPatundas(パトゥンダス)まで

急登を登る。視界が一気に広がり目の前には目指すシスパーレが見え、足元には花の絨毯が広がっていた。パサー氷河左岸にある4,000 mのB Cまで緩い下り道をたどる。この日も約3時間半ほどの歩きで昼にはB C到着。パサーピークを目指すパキスタンの登山隊が既に入山していた。

〈高度順化・下降路の偵察〉

7月28日、高度順化と下降路・北東壁の偵察を兼ねて、初登ルートへ向かう。B Cからパサー氷河を横断し



北東壁ルート

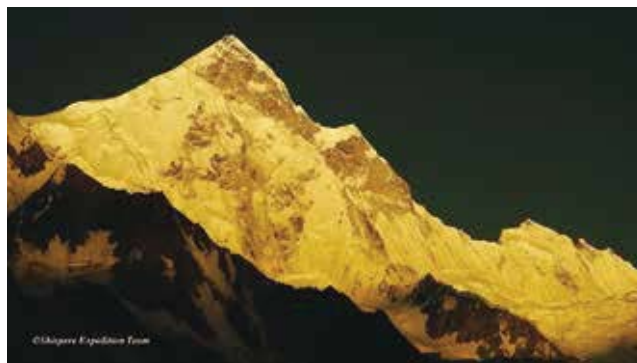
て右岸に渡り、東支稜に取り付く。氷河はまさに迷路のようで、右往左往しながら安全なルートを探すも、クレバスをジャンプでやり過ごす場所も多かった。東支稜に取り付くタイミングも難しく、氷河と東支稜側壁のコンタクトラインを行ったり来たりしながら進み、西面の雪壁から稜線に上がる。翌日はさらに上部5,600mまで稜線をたどり、下降路の状況を把握し一気にBCへ戻った。稜線の岩稜には過去の登山隊が設置したFixロープが多少残っていた。

〈パスピーク〉

BCで2日間休養した後、パスピークへ向けて出発。パスピーク(7,478m)はシスパーレの北西8km程に位置し、下部アイスフォールさえ越えてしまえば技術的困難は少なく登れる。今回は高度順応とシスパーレ北西稜の偵察のために登山許可を取っていた。パキスタンのパス隊は下部アイスフォールの状態が悪く、ルート工作も進まず早々にBCを撤収し下山していった。我々は遠回りではあるが、パス氷河の右岸からシスパーレ北面のプラトーに登り、大横断してパスピークへ向かう安全なルートから進んだ。残念ながら悪天候に阻まれ、登頂することはできなかったが、6,750m(6,400mで2泊)まで高度順化を行いBCへと下山した。次の好天期でシスパーレに挑戦かと思われたが、数日間の悪天予報が続いた為フンザに下山し3日間の休養をとる。

〈シスパーレ1回目の挑戦〉

BCに戻っても、相変わらず曇りや雪の天気が続く、天気予報とのにらみ合いが続く。今年の夏はパキスタン全土で雨が多く、山岳地域は土砂崩れも頻発していたらしい。パスで高度順応から9日後、しびれを切らして、多少の悪天なら下部では影響少ないと判断し、曇り空のなかBCを出発したが、午後から降雪でホワイトアウトになり進むべき方向もよく分からなくなってしまった。結局、5,000mで一晩待機したが、積雪も40~50cm程あり、到底壁に取り付ける状態ではなく



黎明のシスパーレ

なってしまう、渋々とBCへ引き返す。

〈シスパーレ2回目の挑戦〉

ここまできたら、我慢比べ。壁の雪が安定して、安全に取り付けるまで、最後のチャンスにかける。予報では晴れになっていても、シスパーレの山頂だけは常に曇っていてなかなか姿を見せることはない。明らかに登山前半の天気とは変わってしまった。

8月17日、午前中の数時間だが、天気が回復し、シスパーレの壁に陽が当たった。翌18日も相変わらずスッキリしない天気だが、意を決してBCを立つ。歩き慣れた迷路氷河を横断し、いよいよ北東壁に取り付く。初日はセラック崩壊の危険性が高いルンゼから始まるが、案の定大きな崩壊に捕まる。最初は小さな崩壊で少し雪を被ったぐらいで済んだものの、2回目は大きな音と雪煙で、見るからにこれはヤバイという規模。急いで逃げるも、途中でクレバスに片足がハマリ、繋いでいるロープもピンと張られ、お互いが中途半端にしか隠れられず、1分ほど爆風雪にさらされる。しばらく息ができないほど強烈な風であったが、お互い埋まることはなく、事なきを得た。逆にこんな大きな崩壊にあっても、なんとかなるといって吹っ切れがついたのと、さすがにしばらく大きな崩壊はないだろうという勝手な安心感で、その後はスムーズに通過できた。天気の影響で出発が遅れたこともあり、初日は予定より少し手前の雪稜上を整地して幕営。



C1・C2間



C1直下

8月19日、テントサイトより尾根を乗越して60～70°の冰雪壁に取り付く。少し雪が被っているものの、ほぼアイススクリーでランナーが取れた。スピードをあげる為、中間支点は1本でひたすら同時登攀を続ける。スピードは早いものの、ふくらはぎは徐々に悲鳴をあげている。S字状の冰雪壁を越え岩壁にぶつかったら、基部を左へ4Pトラバースしてルンゼ状岩壁に取り付く。この頃から天候は崩れだし、頭上からひっきりなしにスノーシャワーが降りかかってくる。当初の予定では、岩壁基部でビバークできるかと思われたが、そんな場所は一切なく、抜けきるか今日のスタートまで戻るかの選択しかなかったため、降りしきるなかクライミング再開。薄氷ではあったが、なんとかアイススクリーでランナーが取れた。時折大きなスノーシャワーに身体を剥がされそうになるのを耐えながら、2Pで岩場を越える。期待していたテントサイトはすぐには見つからず、ルートとは逆側の急雪壁を3P登ると、雪崩を避けられる雪稜に出られた。細い雪稜ではあったが、なんとか2人が横になれるスペースを切り崩し幕営。

8月20日、昨日からの積雪が少しでも安定すればと、壁に陽が当たってから出発。昨日余計に登った急雪壁を2P懸垂下降してルートに戻る。さらに冰雪壁を左へ3Pトラバースすると、第2の岩壁基部に達する。傾斜は大してないものの(60°)、大きなスラブ岩に雪や氷が乗っかっているだけで見るからに悪そう。さすがにトップも空荷になってトライ。前半はスクリーが半分まで入って効いてるかどうかわからないプアプロテクションでなんとか進めるも、途中で氷も雪もないスラブ岩に支点が取れなくて時間を食う。そろそろふくらはぎも腕も限界に近づいてきてしまったので、意を決してノープロテクションで突っ込む。するとなんとか氷にアックスが刺さり、足ブラになりながらも、次の一手が出せた。こんな高所で気合いの声が出てしまったのは初めて。なんとか氷で半刺しのスクリーでプ

C2・C3間の雪壁のトラバース



ロテクションが取れて気が緩んだのか、次の一手でアックスが外れフォール。フォール中は中間ランナーが走馬灯のように思い出されたが、奇跡的にどれも抜けず、怪我なく止まった。なんとかクライミング再開し、1Pで岩場を突破することができた。終了点からは3P冰雪壁をトラバースして”くの字冰雪壁”をひたすら登る。この頃からまた雪が降り出し、スノーシャワーが降り注いでいたので、確保しながらの登攀となった。冰雪壁を登りきったリッジを切り崩して幕営。

翌21日、昨夜から降り続いた雪は、何度もスノーシャワーとなって襲い、テントの半分以上は埋まっていた。朝から止む気配がなく、視界も悪いため1日停滞日となる。順応高度を越えてのビバークの為、中島は高山病の影響が出ていて食欲は無くなっていた。

22日、予定していた核心部(岩場)も抜け、標高差的には山頂に届く高度であったので、気張って早起きするも、まだ雪は止んでない。視界が開けた6時ようやくテントを出発する。昨日までの降雪でスタートから深いラッセル。急斜面をバンザイしてラッセルしたり、空荷でラッセルする様は、まさに日本の冬山を登っているようだった。しかし、日本のそれとは大きく違う標高の影響で、身体が思うように動かず時間だけが過ぎ



C3直下



頂上の平出(左)と中島(右)

てゆく。テントサイトから1P急雪壁、3P右の雪稜へトラバース、4P雪稜を登ると、ようやく頂上稜線へと出た。深い雪に苦戦し、時間は既に11時を回っていた。ここにきてようやく衛星電話が繋がったため、翌日の天気予報を日本から入手する。翌日の予報は悪くないものの、本日の予報もクリアとなっている。風雪にさらされ、どこがクリアなんだ! ?と叫びたいような天気ではあるが、視界はそれほど悪くない。頂上まで400m近く残っているが、置いていけるもの全てその場にデポして、少しの行動食と飲料、ロープ1本と最低限の登攀具を身につけて急いで頂上へ目指す。風は強いものの、雲の隙間からラカポシが見えることがあった。途中からは完全に雲の中で、帰路の方角を確かめながら進む。視界が悪いため、幾度となく偽ピークに一喜一憂しながら氷雪壁を進んでいくと、ついに登るべくピークが無くなった。山頂からの景色はなく、感動に浸る余裕も一切ない。時間は14時半を回っており、ホワイトアウトした帰路のことが気がかりだ。風雪にさらされた平出のヒゲは、サンタのように氷が張り付いた。山頂から留守本部に電話を入れ、早々に下山にかかる。既にトレースはほとんど消えていたが、コンパスを使用しながらなんとか暗くなる前の夕方にデポ地に戻る。視界があればさらに高度を下げたかったが、風雪の視界不良のため、本日はこの斜面を削ってジバークとなる。相変わらず夜中はスノーシャワーにテントを襲われる。

23日、相変わらずの風雪で目覚める。登頂の喜びなんかより、果たして安全にこの場を脱出できるのか。今やそんな状況と化していた。下山は雪崩やセラックの危険性が少ない初登ルートを選んだが、決して簡単なルートではない。東稜のプラトーはただだっ広く、視界がなければ下降路が見つけられない。視界が少しでも回復するよう、祈るような気持ちでテント内でスタンバイする。6時30分頃、風は依然強いものの、視界が少し回復した隙を狙って出発する。雲の隙間から一瞬覗かせた下降路の東支稜へ進路をたどるも、行く手をセラックの絶壁に阻まれる。初登ルートの下部は偵察できていたものの、中間と上部は未体験。アップダウンがある雪稜を下る程度にしか考えていなかったが、そう簡単には行かない。大きなセラックを迂回したり、セラックの舌端を懸垂下降したりと、過去の記録通りには辿れなくなっていた。途中で3つのピークがあり、登り返しに少し苦労はするものの、徐々に視界も良くなり、風も弱まっていったため、できるだけ標高を下げることに専念する。偵察時に到達した地点まで来て、よう

やく帰路の安全が確保されて、安心して幕営する。BCを出発して6日目、ようやくスノーシャワーに悩まされることがなく、フラットで安全な場所にテントを張ることができた。

最終日、既に安全圏まで降りたように身体は錯覚したようで、足取りは重い。幾度となく横断した氷河も思い通り下れず、いつも以上に右往左往してベースキャンプに到着した。登頂時よりよっぽどベースキャンプへ戻った時の方が、込み上げてくるものが大きかった。何より無事に戻って来れたことに。

〈シスパーレ行動記録〉

- 7月17日 日本～イスラマバード
- 7月25日 パスーよりトレッキング
- 7月26日 BC (4,000m) 入り
- 7月28・29日 初登ルート5,600mまで偵察・順応 (宿泊5,160m)
- 8月1～4日 パスーピーク方面へ6,750mまで順応 (宿泊6,400m)
- 8月7～9日 好天待ちのため、フンザで休養
- 8月13・14日 アタックを試みるも大雪の為5,000mで一泊してBCに引き返す
- 8月18日 BC～C1 (5,450m)
- 8月19日 C1～C2 (6,500m)
- 8月20日 C2～C3 (6,850m)
- 8月21日 C3停滞
- 8月22日 C3～山頂(7,611m)～C4 (7,200m)
- 8月23日 初登ルート下降～C5 (5,750m)
- 8月24日 C5～BC
- 8月25日 BC撤収～フンザ
- 8月28日 イスラマバード着
- 9月1日 日本着

(記 中島健郎)

ニュージーランド北島のダイナミックな自然を満喫

**北島の名峰ルアペフ山、タラナキ山登頂と
トンガリロ・クロッシング 9日間**

発着地 東京 旅行代金 ¥598,000

出発日 1/16(火)・2/24(土)・3/17(土)

※燃油サーチャージは、旅行代金に含まれております。

旅行企画・実施 観光庁長官登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員/ボコフ保証会員

ALPINE TOUR サービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋2-8-11 第7東洋海事ビル4階 ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557

e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

平成29年度中高年安全登山指導者講習会(東部地区)報告

平成29年度中高年安全登山指導者講習会(東部地区)が9月22日(金)～24日(日)の日程で、静岡県静岡市で開催された。会場は、22日が静岡駅の駅ビル「パルシェ」の7階会議室、23日の実技講習は静岡市内の「竜爪山」、23日の講義と研究討議は宿泊ホテル「静岡ホテル時之栖」の会議室で行われた。

受講者は、青森1、宮城3、福島2、新潟1、群馬2、栃木1、埼玉8、千葉1、東京2、神奈川2、静岡4、愛知1、三重6、滋賀3、京都1と1都1府13県の38名(男24名、女14名)が参加し、主催者、講師、スタッフを合わせると61名となった。

1日目は、受付、開講式のあと、国際山岳医の大城和恵講師による、講義1「ファーストエイド～初期対応と緊急性の見極め」をテーマに講義を行った。山でのファーストエイドは予防、応急処置、救助要請の3つのステップがあり、知識や技術を学んで予防のことが第1である。それでも何か起きてしまったら応急処置を実施し、さらに自分たちの手に負えない時は救助要請をする。どのような人を、どのタイミングで救助要請するか、緊急性の見極めを理解することが大切である。山で傷病者に遭遇したときどのようにしたらよいかの手順が3 S A B C D Eである。最初の2 Sは安全と状況の確認、次ぎのSは傷病者の頭、首、背中を真っ直ぐに保つこと、Aは気道の確認、Bは呼吸の有無、Cは脈と出血の確認、Dは致命的な外傷と意識の確認、Eは環境・天候の確認である。この初期対応で異常があり緊急性が高ければ救助要請を行い「山岳遭難です」と、明確に伝えるよう説明された。

講義2は、静岡県警山岳救助隊長の鈴木久二康講師による、「静岡県における山岳遭難事故の実態と救助について」の講義が行われ、静岡県警では、ウェブサイト



開講式

のコンパスを利用した登山届を推奨しているという。県内の遭難発生件数は富士山が65%を占めていて、富士山の遭難を減らすことが全体の減少に繋がるが、登山者の形態が特異であるので難しいとのこと。救助要請方法やヘリに発見される工夫、実際のヘリによる救助の動画を視聴し、救助の大変さがよく分かった。

2日目は実技講習で竜爪山において実施された。登山口で講師の大城先生の用意したOS1 500mlを飲んで出発。登山行動中にファーストエイドの実技を先生の指導のもと、登りと下りの2か所で実施した。2人1組が負傷者と救助者となり、けがの状況や天候の状況を仮定して、初期対応としての3 S A B C D Eの実習を行った。手順に沿って、状況確認、応急処置、救助要請の判断と一つ一つの手順を確認し、先生のアドバイスを受けながら熱心に取り組んだ。救急処置の出来栄などの評価や留意点を詳しく説明されよく理解できた。併せて、コース途中で岳連の指導員による読図とナビゲーション、登山装備を利用した搬送法の実技も実施した。

3日目は北村憲彦講師による、講義3「中高年登山者



研究協議



実技講習

の現状と問題点について」と題し講義を行った。最近の山岳遭難の概況として、中高年者の遭難が急激な増加にあり、道迷いが38%、転倒・滑落が37%と両方で75%を占めている状況を説明。中高年登山者の問題点として他力本願で自立していない登山客の増加、登山に必要な体力、技術、装備などの理解不足やリスク管理のできていない登山などを挙げた。中高年登山の安全対策は山の特異な環境を意識した体力づくりや登山客から自立した登山者となること、登山行動のリスク管理や、ダメージ管理のできるタフな登山チーム作りが必要であるとした。

研究協議は3グループに分かれて実施した。低体温症及び転倒・滑落による遭難防止の2テーマを提示し、発生原因と防止対策についてのリスクコントロールと、遭難の拡大防止のためのダメージコントロールについてブレインストーミングを行った。各人が自由にテーマに対するアイデアを出し合い、グループごと成果を発表した。このツールはチームの良好なコミュニケーションや組織強化など様々な場面で利用できる有効な手段であるので覚えておくと良い。



文珠岳山頂

今回の講習会の会場地は参加しやすく利便性の高い会場として静岡市を選定した。駅ビルの講義会場は受講者から喜んでいただいた。又、雨天の予報に心配された実技講習も、終盤に小雨があった程度で予定通りに実施でき安堵しています。

3日間にわたる本講習会が事故なく無時に終了することができましたのも受講者の皆様並びに関係各位のご協力の賜物と厚く御礼申し上げます。ありがとうございました。(静岡県山岳連盟理事長 木ノ内高嘉)

平成29年度自然保護委員総会 第41回山岳自然の集い—白山大会—実施報告

平成29年度自然保護委員総会(第41回山岳自然保護の集い白山大会)が、9月9日～10日(オプションの白山登山が10日～11日)、石川県白山市にて、石川県山岳協会(以下、石川県山協)の主管にて開催され、30都府県から104名が集った。

開山1300年を迎えた白山での開催に当たり、テーマを「悠久の歴史を守り続ける白山文化に学ぶ」とし、日本古来の山岳文化を想い、山岳自然保護へと繋げる契機となることを期した。総会日程の第1日目を開会式・基調講演・総会議事、第2日目をフィールドスタディー、第2日から第3日目をオプションとし白山登山が行なわれ、全プログラムを成功裏に終えた。

(第1日目)

冒頭の開会式では能田輝夫石川県山協理事長の開会宣言のあと、伊藤克己日山協副会長・松隈豊日山協自然保護委員長の主催者挨拶、高田和彦石川県山協会長の主管挨拶に続いて、開催地元白山市から臨席の井田正一副市長から来賓挨拶が行われた。

伊藤副会長の挨拶では、組織の改称に触れ、競技団体的イメージが強くなったが中身は同じとし、登山部の活動は大切で、自然保護は登山の重要部門であると

述べ、教職時代にしばしば訪れたことのある白山に想いを繋げ、この総会が有意義な機会となることを祈念するとした。

開会式のあと、石森長博石川県山協副会長の講師で、「白山信仰と文化遺産」のタイトルで、1時間ほどの基調講演が行われた。概要は次の通り。

(講演概要)

日本では、山岳には神霊が宿り、それを対象とする自然信仰が古来より行われていた。白山では、僧・泰澄が1300年前に登頂を果たして以来、日本古来の信仰が渡来の仏教を融合し、白山信仰として世に広まっ



オプションの白山登山



ていった。平安時代には、石川・福井・岐阜の3県に「馬場」と呼ばれる登拝の拠点と「禅定道」と呼ばれる登山道ができ、盛んに登拝が行われた。開催地にある白峰地区の集落は越前禅定道の経路として中世以降栄え、その名残を今に留めている。明治時代の廃仏毀釈の難を免れた頂上仏が下山仏として白峰地区の林西寺に安置されている。

白山は2,000m級山岳の日本最西端に位置するため、貴重で豊かな高山植物の西限地帯となって、ハクサンコザクラなど「ハクサン」の文字を冠した固有種の植物を産し、その多さは古書「白山草木志」に著述されている。講師は結びに「自然界における人間の貴重な文化遺産や歴史との調和を図り、視野を広めた自然環境を保全することが肝要である。」と説いた。

引き続き行われた総会議事では、平成28-29年度自然保護委員会活動報告と、参加団体から活動状況の発表、質疑応答が行われた。議事の詳細については日山協ホームページを参照願います。

夕食後、一段落して懇親会が和気藹々に行われ、談笑に交流に時間を忘れるほどであった。

(第2日目・第3日目)

明けて、10日には、白峰地区伝統的建造物群保存地区等視察(1班)とオプションの白山登山(2班)の2つのグループに分かれ、エキスカッションのフィールドスタディーが行われた。

1班には37名が参加し、「白山砂防科学館」を見学のあと、白峰地区の旧山岸家住宅(往時の庄屋邸)、白山下山仏を安置する林西寺、白山ろく民俗資料館を巡

り、伝統文化を学習した。

2班には44名が参加し、11日までの1泊2日で別当出合から砂防新道を往復する白山登山となった。今回の登山コースの砂防新道は、中飯場や甚之助小屋にエコトイレ・水場が整備されたコースであった。登山口からすぐに自然公園特別保護区であり、固有種のハクサンオオバコが自生しているが、外来種のオオバコ除去活動が進められていると聞く。「ハクサン」を冠する植物として、弥陀ヶ原付近ではハクサンナナカマドの赤い大粒の果実や、ハクサントリカブトの深紫、頂上直下で地這うハクサンゴヨウマツ(他ではハイマツの様相)、白山ならではの自然を体感した。

(記 松隈 豊)



平成29年度臨時理事会報告

平成29年9月3日(日)に東京渋谷の岸記念体育会館504,505会議室で平成29年度臨時理事会が開催された。

1. 出席者

会長：八木原罔明、副会長：亀山健太郎、高橋時夫、伊藤克己、平山裕示、専務理事：尾形好雄、常務理事：小野寺齊、水島彰治、小日向徹、合田雄治郎、仙石富英、蛭田伸一、町田幸男、理事：相良忠麿、中瀬和徳、小野倫夫、吉田弘司、小宮山稔、森庄一、滝田博之、古賀英年、松本実、木村康男、工藤文昭、監事：内藤順造、中島正喜

同席者：多賀啓、和田研史両弁護士

欠席者：村岡正己常務理事、古屋寿隆監事

以上、理事：25名、監事：3名のうち、理事24名、監事2名の出席があり、理事会は成立。(定款第33条)

会議に先立ち八木原会長から「4月に協会名を変更した。本協会を取り巻く環境の激変に対応するために諸規程の整備に迫られ、本日の臨時理事会の開催となった。十分な審議をお願いしたい。」と挨拶。

続いて合田常務理事から「スポーツ団体のガバナンスについて」説明があった。スポーツ基本法や、事例を用いて、法の整備、規程類の整備は必須。HPに掲載して透明性を確保する。財務会計の適正化も必要。と語られた。

定款に基づき八木原会長を議長とし、議事録署名人を会長と出席監事2名に指名して議事に入った。

2. 議事

(1)議案第1号 諸規程の改定について

合田常務理事が資料に基づき下記各々について提案説明を行った。

①組織管理・運営規程及び組織図の改定について

◎2文字訂正して提案通り承認された。

②登録選手規程及び細則(新設)、日本代表チームに関わる規程の改定について

肖像権について説明があった。肖像権は元々当該選手自身に帰属するとされたが、代表ユニフォーム着用の肖像権を手放しでよいのか、という点が検討され、第5条第5項に一部条文の追加があった。

◎先ず登録選手規程の7条、代表ユニフォームに関する規程の5条について承認が諮られ異議なく承認された。

続いて登録選手規程の第11条に「高体連」が加筆され、細則については、A登録料を5,000円とすることなどが修正され承認が諮られた。

◎登録選手規程及び日本代表に関わる規程の残りの条文は承認された。

③理事会規程細則(新設)について

◎提案通り異議なく承認された。

④予算管理規程の改定について

一部文言の訂正後承認が諮られ、承認された。

⑤契約審査会規程の改定について

一部文言の訂正後承認が諮られ、承認された。

⑥旅費等規程と謝金及び報酬規程の改定について

ガバナンス委員会において再度検討することになった。

⑦自然保護指導員規程の改定について

一部文言を確認することで承認された。

(2)議案第2号 賛助会員の入会承認について

◎西村巨氏(山口県)の入会が異議なく承認された。

3. 報告

①報告第1号 平成29年度第1次補正予算について(原因と改善策)

②報告第2号 山岳スキー競技の第3回冬季ユースオリンピック種目化について

③報告第3号 平成29年度JOC助成金(前年比大幅増額)について

④報告第4号 2018年以降のオフィシャルサプライヤー契約について

⑤報告第5号 日山協山岳共済会上期経過報告

・保険金の支払いが増え、損害率が上がったため平成30年度の優良割引率は15%になる。これによって全体の割引率は46%となる。

・包括保険の賠償責任保険に関しては、事前に日山協に対し、各事業の計画書を届けておけば対象になる。

・「山岳遭難・搜索保険」は、引き続き各岳連に対して加入促進を依頼。各地のトレラン実行委員会にもトレラン保険を周知していく。

4. 閉会

議長が閉会を宣言して、臨時理事会は終了した。

日時 平成29年9月14日(休)
18時～21時40分

場所 岸記念体育会館・4階会議室

出席者 八木原会長、亀山、高橋、伊藤、
平山の各副会長、尾形専務理事、小野
寺、水島、村岡、小日向、合田、蛭田の
各常務理事、中島監事(16名中13名出席)

欠席者 仙石、町田常務理事、古屋監事

冒頭、合田常務理事から、スポーツにおけるサステナビリティについての説明があった。スポーツ団体も人権、環境、労働に配慮し、持続可能にしなければならない。スポーツクライミングにおいては、壁に木材が使われるので、その木材の採取過程における環境破壊や人権侵害(強制労働)等には、常に目を光らせておく必要がある。サステナビリティは、世界的なトレンドでもあり、本協会も今後配慮していかなければならない。

1. 議事

- (1)平成29年度8月常務理事会・議事録の承認について(事前送付済)
異議なく承認された。
- (2)平成29年度9月臨時理事会議事録の承認について(事前送付済)
異議なく承認された。
- (3)諸規程について
合田常務理事が資料に基づいて提案を行った。
謝金、報酬及び交通費支給について議論があり、継続審議となった。
- (4)第13回B J C一般予選要項案、予算案について
資料に基づいて提案があり、異議なく承認された。
- (5)第8回全国高等学校選抜スポーツクライミング選手権大会実施要項案について
資料に基づいて提案があり、異議なく承認された。
- (6)スポーツクライミング運営に関する規程について(一般予選の公認大会認定制度含め、JMSCA主催大会の基準について)
「スポーツクライミング公式大会管理規程案」、「スポーツクライミング大会安全管理細則案」、「スポーツクライミング一般予選大会細則案」が提案されたが、ガバナンス委員会で検討して再提出することになった。
- (7)バラクライミングカップSheffield大会の派遣について
2名の派遣が承認された。
- (8)スポーツクライミング世界選手権2019について
日本での開催が可能かどうか、年内に最終決定することにした。
- (9)東京五輪1000日前プロモーションに

- ついて
提案通り異議なく承認された。
- (10)「イェジ・ククチカ映画の夕べ」共催の件について
提案通り異議なく承認された。
 - (11)第3回ユースオリンピック代表選手について
土肥圭太、田中修太、中島大智、中村真緒の推薦が了承された。
 - (12)スポーツクライミング部で選手に対する説明会の開催について
12/17の開催で承認された。

2. 報告事項

- (1)8月度月次決算報告について
- (2)JOC強化拠点について
- (3)29年度専門委員会・委員確認/委嘱状について
- (4)JOC助成金について
- (5)JSC調査の結果報告について
- (6)ルートセッター講習会について
- (7)AD委員会報告について
- (8)各種SC大会報告について
- (9)生涯スポーツ功労者表彰について
中村保氏の受賞決定が報告された。

3. 指導員・審判員 検定結果報告

平成29年度スポーツクライミング ルートセッター講習会の認定結果

公認合格：高本憲孝(三重)、平野正行(栃木)、松田修一(大分)
C級合格：古畑和音(東京)、高田知堯、
福田宗次郎(以上、鳥取)

上記、提案通り異議なく承認された。

4. 後援報告、協賛等の依頼について

- (1)アウトドア・ビレッジカップ後援名義
- (2)32回神奈川県民登山後援名義
上記提案通り異議なく承認された。

5. 専門委員会動静

8月(8月10日～9月10日)

(1)指導常任委員会

9月4日(月) 出席11名 委任3名

- ア)夏山リーダー制度について
・8/19,20日でテキストの精査。
- イ)遭対委員会報告について
①講習会謝金を他の委員会に合わせる。
②夏山リーダーの講習内容を大阪岳連のリーダー育成講習と比べてみる。
③高体連から雪崩の講習の要望があった。高校の先生で指導員を持っているのは約100人
→各岳連と高体連の関係、現状をアンケートのような形で、指導委員会が調べてはどうか。今後は、高体連と各岳連の連帯が望まれる。
- ④来年の遭対総会は海員会館で行う、予約した。
- ウ)スポーツクライミング部報告
・ブロック別研修会(北信越、四国、九州)の義務研修について
- エ)指導者専門科目修了認定申請について
- オ)スポーツクライミング上級指導員養成中央開催(宮城会場, 11/4, 5, 18)

- について
カ)登攀技術研修会(福島、10/28, 29)について
キ)国体前の研修を義務研修にする件(愛媛県西条市会場)について
ク)ドキュメントについて
・平成29年度の検定基準(A C指導員、上級指導員)
・平成29年度の検定基準(S C指導員、上級指導員)
・平成29年度SCテキストの進行状況

(2)自然保護委員会

8月17日(休) 出席14名 委任2名

ア)議事

- ①議事録確認
7月度自然保護常任委員会議事録について
- イ)報告
①平成30-31年度環境省自然公園指導員の候補者推薦について
②山岳団体自然環境連会(7/21)報告
③日山協自然保護委員総会白山大会について
④環境省自然公園指導員功労者(環境局長表彰)
明田通世(北海道)、関口薫(千葉)

ウ)審議

- ①自然保護委員総会白山大会について
- ②自然保護委員会プロジェクトについて
・自然公園指導員養成テキストについて(松隈)
・「山の神」調査について(紅葉)
- ③関東地区自然保護交流会について(小高)
・雲取山 奥多摩小屋トイレについての研修(10/21～22) 都岳連担当
- ④環境省自然公園指導員の退任者に対する補充について
5名退任、2名補充 小高、斎藤

エ)情報交換・連絡事項

- ①白山大会の準備作業(8/31)

(3)遭対委員会

8月30日(水) 出席13名

- ア)夏山リーダー検討会(8/19, 20)について(出席者：西内、清水、松本)
・テキストの内容について精査中。
・9月中に大阪府岳連のリーダー育成講習と夏山リーダー講習内容の比較検討
- ・UIAA登録については講習会が軌道に乗り次第行いたい。
- ・次回8/31都岳連の事務所運動生理学のまとめ。9/30～10/1都岳連の事務所集中会議。
- イ)高体連顧問の講習について(西内副委員長)
- ウ)夏山レスキュー講習会について(9/8～10 国立登山研修所)
- エ)遭対委員メールングリストについて
・10/1からGoogleに切り替える。

(4)ジュニア委員会

- 8月28日(月) 出席5名 委任2名
- ア)立山ジュニア登山教室2017の反省
・実施時期、日程、内容、募集方法、スタッフの人数と担当等について協議した。
 - イ)9月以降の行事について

- ・2月ジュニア普及情報交換会
- ・3月なすかし雪遊び隊
3/27～29の日程で申請書提出
- (5)国体委員会-1
7月20日(木) 出席15名
ア) 審議事項
①日体協国体委員会報告(6/16)
- ②本国体実施計画書(案)、宿泊、予選会報告審査状況
・監督会議前研修会について
- ③ブロック別研修会実施要項について
・競技運営員規程改正、競技運営、の内容、受講料等について
- ④福井国体リハーサル大会運営準備について
- ⑤規則改正の方向性の確認
・山岳競技施設認定規則の検討イ) 報告事項
①常任委員の推薦について
- ②日体協からの照会事項(愛媛国体J R 割引券、国体運営部会委員推薦)
- ③国体後催催の準備状況について
- (6)国体委員会-2
8月24日(木) 出席11名
ア) 審議事項

- ①愛媛国体準備進捗状況について
- ・都道府県予選会、ブロック大会報告について
- ・9/10抽選会について
- ②福井国体リハーサル大会運営準備について
- ・リハーサル大会(案)について
- ・役員編成について
- ③ブロック別研修会について
- ④規則改正の方向性の確認について
・山岳競技施設認定規則の検討イ) 報告事項
①国体後催催の準備状況について

6. その他の重要事項
8月10日～9月13日
- (1)第2回「山の日」全国大会 8月10日(木)～11日(金) 於:那須町文化センター八木原会長、尾形専務理事
 - (2)第20回JOCジュニアオリンピックカップ 8月12日(土)～14日(月) 於:南砺市桜が池C C 八木原会長、平山副会長、村岡常務理事
 - (3)ルートセッター研修会 8月15日(火)～16日(水) 於:南砺市桜が池C C

- 山本委員長
- (4)みんな集まれ! 登山教室 in 立山
8月17日(土)～20日(月) 於:国立立山青少年自然の家 仙石常務理事、中瀬理事
- (5)オフィシャルサプライヤー・プレゼンテーション 8月25日(金) 於:岸記念体育会館505会議 尾形専務理事、小野寺・村岡・合田・小日向常務理事、相良理事
- (6)I F S Cユース世界選手権 8月30日(木)～9月12日(火) 於:インスブルック 平山副会長、小日向常務理事(9/5～9/12)
- (7)日本山岳写真協会表彰式 9月2日(土) 於:上野精養軒 八木原会長
- (8)臨時理事会 9月3日(日) 於:岸記念体育会館 八木原会長ほか
- (9)J S C実態調査 9月5日(火) 於:日山協事務局 尾形専務理事、小野寺常務理事
- (10)上月スポーツ選手支援事業認定式 9月6日(水) 於:ザ・リッツ・カールトン東京 小野寺常務理事
- (11)国立登山研修所「登山研修」編集会議 9月6日(水) 於:J S C会議室 尾形専務理事
- (12)山岳レスキュー講習会(東部地区) 9月8日(金)～10日(日) 於:国立登山研修所 町田常務理事
- (13)自然保護委員会総会 9月9日(土)～10日(日) 於:石川県白山市 伊藤副会長、松隈自然保護委員長
- (14)第72回愛媛国体山岳競技抽選会 9月10日(日) 於:岸記念体育会館 尾形専務理事、村岡常務理事、西原委員長

寄贈図書

寄贈本	国立青少年教育振興機構	「体験・遊びナビゲーター3」監:国立青少年教育振興機構
雑誌	(株)山と溪谷社	「ROCK & SNOW」077
	(株)山と溪谷社	「ワンダーフォーゲル」132号
会報	(株)ネイチュアエンタープライズ	「岳人」No.844
	(株)山と溪谷社	「山と溪谷」No.990
	(公財)日本体育協会	2017年8月28日号 体協フェアプレイニュース/体協スポーツニュース
	(公財)健康・体づくり事業財団	「健康づくり」No.473
	兵庫県山岳連盟	「兵庫山岳」第603号
	中華民国山岳協會	「中華山岳」《雙月刊》260
	(一財)日本万歩クラブ	「帰れ自然へアルク」通巻576号
	(一財)日本防火・防災協会	「地域防災」No.15
	日本トレーニング指導者協会	「JATI EXPRESS」Vol.60
	全日本ボウリング協会	「JBCnews」第550号
	三峰山岳会	「岩つばめ」NO.354
	(公財)京都府体育協会	「京都府 体協時報」第125号
	常北山水会山岳部	「山水」第43号
	(公社)日本武術太極拳連盟	「武術太極拳」No.336
	(公社)日本山岳会	「木の目 草の芽」第128号
	愛知県山岳連盟	「愛知岳連ニュース」第423号
	日本勤労者山岳連盟	「登山時報」No.512
	岩手県山岳協会	「山協ニュース」第201号
	Korean Alpine Federation	「大山聯」Vol.225
	東京野歩路会	「山嶺」VOL.95
(公社)日本山岳会	「山」No.868	
La rivista del Club alpino italiano	「Montagne360」2017.9	
Corean Alpine Club	「山」Vol.253	
(公財)日本体育協会	2017年9月19日号 体協フェアプレイニュース/体協スポーツニュース	
新潟県山岳協会	「新山協ニュース」第332号	
おいらく山岳会	「山行手帖」No.694	
長野県山岳協会	「やまなみ」No.226	
(株)ソル・メディア	「クライマーズ」# 0005	
日本ヒマラヤ協会	「ヒマラヤ」No.482	
中国登山協会	「山野」2017/09 総229期	

編集後記

紅葉のシーズン出かけるには良い季節となった。2020東京オリンピックへのカウントダウンも始まりスポーツに関心が集まっている。メダルに期待のかかる競技には多くの補助金が交付されているようだが、一部に不適正経理処理が問題になっている団体もあるようだ。本協会が今取り組んでいる規程の整備とコンプライアンスが肝要だと思う。(広報担当 水島彰治)

一般財団法人 日本トレイルランニング協会
神奈川事務局
〒252-0184
神奈川県相模原市緑区小淵1545-1
☎042-687-4011 FAX 042-687-3980
E-mail kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

妙高赤倉マウンテンレース
パーティカル5K & トレイルラン25K

NPO法人 北丹沢山岳センター
神奈川県・山梨県東部トレイルラン連絡協議会
事務局 〒252-0184 神奈川県相模原市緑区小淵1545-1
TEL. 042-687-4011 FAX 042-687-3980
E-MAIL kitatanzawa@kib.biglobe.ne.jp

- ・北丹沢12時間山岳耐久レース実行委員会
- ・陣馬山トレイルレース実行委員会
- ・道志村トレイルレース実行委員会
- ・八重山トレイルレース実行委員会
- ・東丹沢ヶ瀬トレイルレース実行委員会
- ・上野原秋山トレイルレース実行委員会

大会々長 杉本憲昭

登山月報 第583号

定価 110円(送料別)
予約年間 1,300円(送料共)
昭和45年12月12日
第三種郵便物認可
(毎月1回15日発行)

発行日 平成29年10月15日
発行者 東京都渋谷区神南1-1-1
岸記念体育会館内
公益社団法人
日本山岳・スポーツクライミング協会

電話 03-3481-2396
FAX 03-3481-2395

mont-bell
BOOKS

全国の離島にある 魅力的な100の山を紹介



利尻山、宮之浦岳など日本百名山でおなじみの名峰はもちろん、北海道から沖縄まで日本全国の個性豊かな離島の山を選出。その島でしか出会えない固有種や、下山後のグルメ、立ち寄りスポットなど、本土とはひと味違った山登りを紹介します。



好評
発売中

【価格】1600円(+税) A4判・128ページ

★お求めは全国のモンベルストア、一般書店、ウェブサイトで

【お問い合わせ】モンベル・カスタマー・サービス ☎ 0088-22-0031 / 携帯・IP電話から 06-6536-5740

※フリーコールは携帯・IP電話からはご利用いただけません。

モンベル 書籍

検索

期待される、
という希望。

期待されすぎている、
という不安。

未来は、
希望と不安で、
できている。

明日をつよく。三井住友海上

www.ms-ins.com

立ちどまらない保険。

MS&AD

三井住友海上

あなたの 山岳保険は 大丈夫ですか？

山岳保険の加入は登山者のマナーです

日山協山岳共済会 〒170-0013 東京都豊島区東池袋 3-7-11-707

TEL 03-5958-3396 FAX 03-5958-3397

E-mail sangakukyousai@mbd.ocn.ne.jp

月曜日～金曜日 10:00～17:00 (祝日除く)

携帯からも資料請求ができます。
公益社団法人 日本山岳協会 携帯サイト
(www.jma-sangaku.or.jp/mobile/)



WEBからもお申込みいただけます (www.sangakukyousai.com)